

公立大学法人金沢美術工芸大学
令和元年度業務実績報告書
論点整理表

金沢市公立大学法人評価委員会

大学の教育研究等の質の向上に関する目標（教育に関する目標）
 (1) 教育内容及び教育の成果等に関する目標

中期目標	ア 学士課程教育にあつては、学部の教育目標及び各科・専攻の教育方針に基づき、教養教育と専門教育を行い、学位授与方針に定める汎用的な教養と専門的な造形力を修めた職業人を育成するとともに、学部を本学の教育拠点と位置づける。
------	---

中期計画	年度計画	業務実績（計画の進捗状況）	自己評価	自己評価と異なる評価委員会の評価とその理由	添付資料番号
(7) 学士課程教育を、本学の教育拠点として位置づけ、学部の教育目標及び各科・専攻の教育方針に基づき、これに相応しい教育を実践する。 <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> <p>〔質問・意見等〕 何故評価がIVなのか(年度計画を上回って実施している部分)を具体的に説明してほしい。</p> </div> <div style="text-align: center; margin-top: 10px;"> </div>	(イ) 各科・専攻の教育方針に基づき、学部教育の在り方を検討し、新キャンパス移転に向けた計画の策定を進める。	○教育方針（DP・CP・AP）に基づく学部教育の在り方を、新キャンパス整備における「開かれた美の探求と創造のコミュニティ」というコンセプトを踏まえ検討した上で、金沢市とともに金沢美術工芸大学建設基本設計（30年9月25日～元年8月30日）を策定し、引き続き実施設計の作業を進めた。 ○具体的には、CPに掲げる「2. 専門教育科目の基礎科目においては、自専攻・科以外の分野を選択履修し、さまざまな技法や素材に触れ、多様なメディアを用いた表現や複合的な表現が可能となる科目編成とする」という事項の更なる充実と強化に向けて、若手教員による新キャンパス配置検討ワーキンググループにて、各科・各専攻の教室とともに、共同で活用する工房等の配置を協議した。特に、美術系大学として他に類を見ないほど大規模な「共通工房」は、学部・大学院を通じた専門領域の横断化を目的とするもので、この共通工房を既存の領域を超える新たな芸術創造の拠点と位置づけ、各科・各専攻の教室との機能分担や位置関係を詳細に検討し、基本設計及び実施設計に反映させた。	IV		資料1-2 資料1-3 資料1-4 資料2-1 資料2-2

2

〔回答〕

本学には、「日本画」、「油画」、「彫刻」、「芸術学」「視覚デザイン」「製品デザイン」「環境デザイン」「工芸(漆・木工、金工、陶磁、染織)」の専門領域がある。新キャンパスでは、全ての学生が領域を超えて利用可能な「共通工房」を設けることとし、学生が作品の制作に使用する教室面積の合計の約1/3をこの「共通工房」とすることを、本学の主張として設計に反映させた。当初の計画を超えて、多くのスペースと設備を共有化することで、実技中心の大学にありがちな領域毎の施設管理の弊害を取り払い、設備の重複を防ぎ、共通教育にも有効に活用できる設計となったため「IV」と評価した。

大学の教育研究等の質の向上に関する目標（教育に関する目標）
 (1) 教育内容及び教育の成果等に関する目標

中期目標	ア 学士課程教育にあつては、学部の教育目標及び各科・専攻の教育方針に基づき、教養教育と専門教育を行い、学位授与方針に定める汎用的な教養と専門的な造形力を修めた職業人を育成するとともに、学部を本学の教育拠点と位置づける。
------	---

中期計画	年度計画	業務実績（計画の進捗状況）	自己評価	自己評価と異なる評価委員会の評価とその理由	添付資料番号
(イ) 教養科目においては汎用的能力を培う教育を実践し、基礎科目においては多様な表現力を養う教育を実践する。	(ウ) 一般教育科目においては、汎用的能力を培う教育を実践する。	<p>○元年度から教養科目として「金沢の文化行政」「キャリアデザイン」を新設し、汎用的能力を培う教育を実践した。「金沢の文化行政」は、金沢市の協力を得て、文化行政の実務を担当している職員から講義を受けることで、芸術のみならず広く文化全般において地域と関わるための知識を学生に与え、その意欲を喚起することを目的としている。「キャリアデザイン」は、実務経験のある教員からキャリア形成に関する講義を受けることで、将来にわたり自己の専門的スキルを社会の中で活かしていく道筋を、学生に考えさせることを目的としている。また、博物館学芸員課程科目としてのみの開講だった「博物館概論」を、実務経験のある教員による教養科目の一つとすることで、学芸員を目指す学生に限らず、芸術を志す学生の教養としての位置づけを明確にした。</p> <p>○「フレッシュマンセミナー」では新生が大学での学び方について学ぶ、導入教育という側面とともに、今後の自己のキャリア形成を考え始めるきっかけを得ることも目的としている。そのため、一部の回を国内外での実務経験が豊かな教員が担当し、より実体験に即した講義を行うこととしている。また、「生涯学習概論」では、元年度より石川県内の市町で生涯学習支援に携わっている3名を講師に迎え、現場での支援の在り方を学べるようにした。</p> <p>○語学教育を中心にアクティブラーニングの要素を取り入れた授業を元年度も継続して実施した。 【次頁へ】</p>	IV		資料3-1 資料3-2 資料3-3 資料3-4 資料3-5 資料3-6 資料3-7 資料3-8

大学の教育研究等の質の向上に関する目標（教育に関する目標）
 (1) 教育内容及び教育の成果等に関する目標

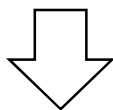
中期目標

ア 学士課程教育にあつては、学部の教育目標及び各科・専攻の教育方針に基づき、教養教育と専門教育を行い、学位授与方針に定める汎用的な教養と専門的な造形力を修めた職業人を育成するとともに、学部を本学の教育拠点と位置づける。

中期計画	年度計画	業務実績（計画の進捗状況）	自己評価	自己評価と異なる評価委員会の評価とその理由	添付資料番号
		<p>【前頁より】</p> <p>○学生の汎用的能力を養う教養教育のあり方を検討する一環として、一般教育等では新たな教養科目拡充の可能性を検討している。その第一歩として、今までにない領域の講師を招聘し、学生・教職員を対象とした講演会を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1月23日 飛谷謙介氏「人工知能と芸術表現」 ・1月30日 小林卓也氏「ドゥルーズの自然哲学」 ・2月5日 ディビッド・ブルースター氏「社会秩序をデザインする」 			

〔質問・意見等〕

何故評価がIVなのか(年度計画を上回って実施している部分)を具体的に説明してほしい。また、新たに実施した講演会の内容が「汎用的能力を培う教育」とどのような関連があるのかを具体的に説明してほしい。



〔回答〕

教養科目の「金沢の文化行政」と「キャリアデザイン」は、従来の一般教育科目に加えて元年度より新たに開講した科目であり、学芸員資格科目である「博物館概論」を教養科目としたことと併せて、教養教育の科目の拡充を図った。加えて、例えば「金沢の文化行政」ではユネスコ創造都市である金沢市と連携し12名の実務担当職員を講師に迎えるなど、当初の見込を上回る内容の充実も実現できたことから「IV」と評価した。また、教養科目の更なる拡充に向けた講演会は、「芸術を創造する能力、それ自体の汎用性を、認識するための教育」を強化する新たな科目の開拓を目的に実施した。

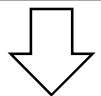
大学の教育研究等の質の向上に関する目標（教育に関する目標）
 (1) 教育内容及び教育の成果等に関する目標

中期目標 イ 大学院教育にあつては、造形芸術に関する高度な理論、技術及び応用を研究教授し、芸術の多様な領域で横断的に活躍できる高度専門職業人を育成するとともに、大学院を本学の研究拠点と位置づける。

中期計画	年度計画	業務実績（計画の進捗状況）	自己評価	自己評価と異なる評価委員会の評価とその理由	添付資料番号
(イ) 研究拠点としての大学院に相応しい、実技、理論における多様で横断的な教育研究の場を設け、学習需要に対応する教育研究の展開と連関を図る。	(I) 大学院生の要望を踏まえた学外の非常勤講師等を招聘し、実技と理論における領域横断型の共通授業を行う。	○大学院運営委員会に大学院特別講義を担当するワーキンググループを設けて、大学院生の意見を聴取した上で、12月14日にプロダクトデザイナーであると同時にプロデュースも手がける角田陽太氏、1月31日には「アートで地域を開く」というテーマで奥能登国際芸術祭等のアートディレクターをつとめる北川フラム氏を招聘し、実技と理論にまたがる領域横断型の共通授業を行った。	Ⅲ		資料10-1 資料10-2

10

〔質問・意見等〕
「実技と理論にまたがる領域横断型の共通授業」とあるが、具体的にどのような内容の授業なのか。



〔回答〕
 例えば北川フラム氏の授業は、まず、領域を問わず全ての学生が受講可能な共通の授業であり、授業で取り上げたアートプロジェクトは、美術、工芸、デザインをはじめ様々な領域のアーティストが参加したもので、かつ実技系のアーティストたちと北川氏に代表される理論系のアートディレクターの協働により実現されたものである。こうした、「複数の芸術領域が連関する」とともに、「実技系と理論系の人材が協働する」ことで実現されたアートプロジェクトやプロダクトデザインのプロデュースに関する講義を、「実技と理論にまたがる領域横断型の共通授業」として開講した。例えば北川フラム氏の授業は、まず、領域を問わず全ての学生が受講可能な共通の授業であり、授業で取り上げたアートプロジェクトは、美術、工芸、デザインをはじめ様々な領域のアーティストが参加したもので、かつ実技系のアーティストたちと北川氏に代表される理論系のアートディレクターの協働により実現されたものである。こうした、「複数の芸術領域が連関する」とともに、「実技系と理論系の人材が協働する」ことで実現されたアートプロジェクトやプロダクトデザインのプロデュースに関する講義を、「実技と理論にまたがる領域横断型の共通授業」として開講した。

大学の教育研究等の質の向上に関する目標（教育に関する目標）
 (1) 教育内容及び教育の成果等に関する目標

中期目標

ウ 定められた学位授与基準、学位審査基準、成績評価基準を厳正に適用し、また不断に検証することによって、芸術系大学に相応しい教育の成果の測定指標を作成し、教育の質を保証する。

中期計画	年度計画	業務実績（計画の進捗状況）	自己評価	自己評価と異なる評価委員会の評価とその理由	添付資料番号
(7) 成績評価システムの総合的な検証を行い、公平性、透明性、厳格性が担保された成績評価を行うとともに、その検証システムを実質的に機能させる。 <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> <p>〔質問・意見等〕 成績評価の運用について、実態に即した形に記述を改めてほしい。</p> </div>	(7) 教務委員会と大学院運営委員会を中心に、成績評価の在り方を総合的に検証し、公平性、透明性、厳格性が担保された成績評価を行い、改善に努める。	○成績評価の在り方については、進級判定及び卒業・修了判定の際に、教務委員会と大学院運営委員会で、その公平性、透明性、厳格性を検証している。 ○特に、30年度入学者より導入した単位認定の評価基準は、S評価を設けた新たな評価基準で、元年度は2年目にあたるため、相対評価よりも絶対評価を重視する姿勢を堅持しつつも、S評価が占める割合や専攻間のバランスについて、適切に運用されているかを年度末の教務委員会を中心に検証し、改善に努めた。	Ⅲ		資料12-1 資料12-2

12

〔回答〕

ご指摘を受けて、以下の表記に改める。

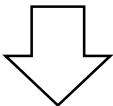
学期ごとの評価は、試験、課題審査、学習報告及び平素の学習状況により行い、学生には次学期の最初に通知表にて示した。また、公平性、透明性の観点から、各科目の評価方法、及びS～Cの段階別の評価基準をシラバスで示し、成績評価に疑義がある場合、学生は成績通知表の受領後速やかに各科目の担当教員まで申し出ることを学生便覧で周知し、申し出があった場合、担当教員は学生に根拠を示し評価の理由を説明し、必要に応じて今後の学習指導も行うこととした。次に、進級判定及び卒業修了判定は、年度末の教務委員会、大学院運営委員会で単位取得状況を確認し、教授会での報告、教育研究審議会での審議を経て、学長が決定した。特に元年度は30年度入学者より導入した評価基準(S評価)の運用2年目にあたるため、引き続き適切に運用されているかを年度末の教務委員会、大学院運営委員会で検証した。また、到達目標に対する絶対評価を堅持しつつ、専攻間での公平性が保たれているかなども検討し、評価に関する考え方について意見交換を行い共有した。

大学の教育研究等の質の向上に関する目標（教育に関する目標）
 (3) 学生への支援に関する目標

中期目標 ア 学習支援体制を検証し、学部教育と大学院教育のそれぞれに相応しい学習支援体制を構築する。

中期計画	年度計画	業務実績（計画の進捗状況）	自己評価	自己評価と異なる評価委員会の評価とその理由	添付資料番号
(7) 授業科目の履修に関する総合的な相談・支援体制を検証し、さらなる活用を進める。	(7) 授業科目の履修に関する相談・支援について、教務委員会と学生支援委員会による合同会議を中心に検証し、改善に努める。	○教務委員会・学生支援合同委員会を2月21日に開催し、履修に関する相談・支援状況の情報を共有、検証を目的に意見交換を行なった。美術大学という個性を前面に打ち出す学生が集まる環境において、各科・専攻における相談及び対応事例から、近年の傾向を知ることができ、自専攻での対応に生かすとともに、この意見交換機会の継続の必要性を認識した。 ○教務委員会では、随時、休学者・退学者・留年者を含む単位未修得者について各科・専攻からの説明を求め、学生個々の状況の把握と共有化した上で、2年度以降も学生の履修状況を見守るとともに、全体的な授業の課題の分量や退学・休学の理由をさらに分析して検討していくこととした。	Ⅲ		資料24-1 資料24-2

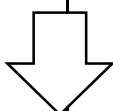
〔質問・意見等〕
 学生個々の状況について、具体的にどのような相談や支援が行われ、その内容をどのように改善につなげたのか。



〔回答〕
 具体的な相談や支援の内容については、学生のプライバシーに関する守秘義務の観点から説明することはできない。また、何をもって改善とするのか、その点についても答えは一つではない。何よりも教員が、学生個々の状況を把握し、学生と真摯に向き合い、正保証人を含めた話し合いの場を設け、結果として、休学者、退学者、留年者となったとしても、最後まで教育的な配慮に努めることが大切である。その指導の質を高めるために、教務委員会と学生支援委員会の合同委員会で、いくつかの事例を共有し、教職員が相互に意見を交換する機会を継続して設けている。

大学の教育研究等の質の向上に関する目標（教育に関する目標）
 (3) 学生への支援に関する目標

中期目標 イ メンタルヘルスを含む健康管理支援体制及び生活支援体制を継続的に検証し、充実させる。

中期計画	年度計画	業務実績（計画の進捗状況）	自己評価	自己評価と異なる評価委員会の評価とその理由	添付資料番号
(ウ) 大学独自の奨学金制度や学生顕彰制度を充実させ、効果的な学生支援を推進する。 <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p>〔質問・意見等〕 何故評価がIVなのか(年度計画を上回って実施している部分)を具体的に説明してほしい。また、添付の資料28中で「2. 検討事項」として⑥研究生及び⑦科目等履修生に関する規程を改正する旨記載があるが、結果はどうなったのか。</p> <div style="text-align: center;">  </div> </div>	(イ) 大学独自の奨学金制度や学生顕彰制度による効果的な学生支援を推進する。	○2年度からの国の修学支援新制度の対象外となる大学院生の修学継続を支援し、教育を受ける機会を確保するため、経済的に修学困難な学生を対象とした「授業料等減免」制度を本学独自の支援制度として整備した。 ○経済的な理由で修学継続が困難となった学生に給付金を支給する「緊急支援奨学金」の制度を、30年度に引き続き教育研究基金を取り崩して実施することを決定したが、対象者はいなかった。 ○海外での研修活動を行った学生に給付する、本学独自の奨学金制度である「ワールドワイド奨学金」も、30年度に引き続き教育研究基金を取り崩して実施することを決定し、一人あたり6万円を7名に支給した。こうした大学独自の奨学金制度の充実を図ったことで、学生の芸術に対する技術力の向上や、海外での研修活動の積極的な取り組み、世界的な視点を持つ人材の育成に取り組んだ。 ○「KANABIクリエイティブ賞」として、公募展・コンクールで優れた評価を得た学生、創造的でめざましい活躍をした学生やグループ、卒業・修了制作展での優秀者を表彰した。受賞者選考にあたっては、教授会での周知、学内各専攻掲示板を活用し、全学的に情報を発信した。	IV		資料17 資料19-7 資料28

34

〔回答〕

本学はこれまで、独自の「授業料等減免」制度を設けて学部生・大学院生の修学支援を行ってきた。このたび2年度より国の修学支援新制度が始まるに際して、大学院生がその対象外となることから、引き続き、経済的に就学困難な大学院生を対象とした独自の「授業料等減免」制度を維持し、国による学部生の授業料減免の基準等にあわせて整備した。結果として、学部生、大学院生ともに、支援の対象範囲はひろがり、修学支援の拡充につながったことから「IV」と評価した。なお、研究生と科目等履修生については、1月30日付で規程を改正した。

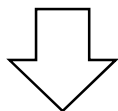
大学の教育研究等の質の向上に関する目標（教育に関する目標）
 (4) 入学者選抜に関する目標

中期目標	入学者受入方針を不断に検証し、これに基づいて学生の選抜を適切に行う。また、大学の入試広報を積極的・計画的に行う。
------	--

中期計画	年度計画	業務実績（計画の進捗状況）	自己評価	自己評価と異なる評価委員会の評価とその理由	添付資料番号
(7) 入学試験とアドミッション・ポリシーの整合性を検証する。	(7) 入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）と入学試験の整合性を検証し、学生の選抜を適切に行う。	<p>○入試委員会において、一般選抜試験ならびに特別選抜試験（推薦入試）を検証し、ともにAPに基づいた選抜内容・方法であることを確認した。確認にあたっては、専攻別の入試記録を利用し、APとの関連性、出題、元年度からの改善点、今後の課題等を検証した。</p> <p>○継続的にこうした取り組みを行うことで、受験者自身の幅広い表現力、対応力を測定することができるようになってきている。</p> <p>○30年度に引き続き、各専攻より入試実施マニュアルを提出し、大学全体としての入試に関する決定事項を再確認した。内容としては、一時退室、試験時間中の対応、遅刻の取扱、面接での質問内容等を中心に確認した。</p>	Ⅲ		

〔質問・意見等〕

3つ目の○に関する記述は、直接的に年度計画に対する実績になっていないのではないか。



〔回答〕

実技試験を重視する本学が、「学生の選抜を適切に行う」ために、毎年、「各専攻の入試実施マニュアル」を確認することは極めて重要である。実技試験を実施する際の留意点として、例えば、デッサンにおけるモチーフの決定プロセス、モチーフと受験生一人一人の位置関係、長時間におよぶ試験の一時退室の取り扱いなど、受験生がデリケートに反応する事柄を、不平や不満を抱かせることなく円滑に行うための繊細な約束事が多々ある。受験生の入試対策にも影響するため非公表としているが、実施マニュアルを毎年点検して改善することは、「学生の選抜を適切に行う」ために不可欠な実績であると認識している。

大学の教育研究等の質の向上に関する目標（研究に関する目標）
 (1) 研究水準及び研究の成果等に関する目標

中期目標	ア 芸術の分野において、地域の文化を振興し、また国際的な交流を促進する研究を行い、研究拠点を形成する。
------	---

中期計画	年度計画	業務実績（計画の進捗状況）	自己評価	自己評価と異なる評価委員会の評価とその理由	添付資料番号
(イ) 本学の特色を活かして、芸術・文化等に関する国際的水準の研究に取り組み、その成果を公開する。 <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; margin-top: 10px;"> <p>〔質問・意見等〕 何故評価がIVなのか(年度計画を上回って実施している部分)を具体的に説明してほしい。</p> </div> <div style="text-align: center; margin-top: 10px;"> </div>	(ウ) 大学の専門性を活かして、芸術分野における国際的水準の研究活動を行う。	○韓国・清洲市で10月8日から11月17日に開催された清洲国際工芸ビエンナーレに参加し、「平成の百工比照」事業の紹介を目的とする展示を行った。加賀象嵌、加賀蒔絵、加賀友禅の工程見本と九谷焼の色絵見本、および金沢クラフトの製品などを展示するとともに、工芸技術記録映像、韓国語と英語の解説パネルを用いて、ユネスコ創造都市・金沢の工芸と本学の研究成果を初めて海外で公開する貴重な機会となった。 ○金沢市で開催されたユネスコ創造都市ネットワーク分野別会議2019におけるプログラムの一環として、10月15日、各国（サウジアラビア、フィリピン、タイ、中国、韓国、バハマ）からの参加者の視察に供するため、日本の金工・漆工・陶磁・染織に関する材料や道具、工程見本、製品などを幅広く収集し研究する「平成の百工比照」事業の資料のうち7割を超える約5,000点を金沢市文化ホールのギャラリーに展示した。金沢市と連携した本学の研究成果をアピールするとともに、学長による解説を行い、参加した研究者との交流を深めた。	IV		資料38-1 資料38-2

46

〔回答〕

本学が金沢市とともに行っている「平成の百工比照」事業は、大学の専門性を活かした、国際的水準の研究活動であると自負している。近年、中期計画にある「その成果を公開する」という点においては、本学の美術工芸研究所ギャラリーや国内の博物館で公開してきたが、元年度の年度計画もその範囲にある。これに対して、韓国の清洲市で開催された国際工芸ビエンナーレでの公開、金沢市で開催されたユネスコ創造都市ネットワーク分野別会議での公開は、それぞれ初めての試みであり、ともに国際的な重要度の高い機会であったという意味で「IV」と評価した。

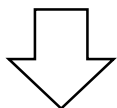
大学の教育研究等の質の向上に関する目標（研究に関する目標）
 (2) 研究実施体制等に関する目標

中期目標	ア 特色ある研究活動を推進するため、研究の実施体制や環境の整備を行い、実技と理論とが連携する研究体制を構築する。
------	--

中期計画	年度計画	業務実績（計画の進捗状況）	自己評価	自己評価と異なる評価委員会の評価とその理由	添付資料番号
(イ) 実技と理論が連携する総合的な研究体制を構築し、特色ある研究活動を推進する。	(イ) 実技と理論が連携する研究体制のもとで、特色ある研究活動を推進する。	○1月31日に「アートで地域を開く」というテーマで奥能登国際芸術祭等のアートディレクターをつとめる北川フラム氏を招聘し、研究を目的とした特別講義を実施した。 ○また、実技系の作家やデザイナー、理論系の研究者や評論家など37名を客員教授として招聘し、実技と理論にまたがる特色ある研究活動を推進した。	Ⅲ		資料9 資料10-2

55

〔質問・意見等〕
 「実技と理論にまたがる領域横断型の共通授業」とあるが、具体的にどのような内容の授業なのか。



〔回答〕
 例えば北川フラム氏の授業は、まず、領域を問わず全ての学生が受講可能な共通の授業であり、授業で取り上げたアートプロジェクトは、美術、工芸、デザインをはじめ様々な領域のアーティストが参加したもので、かつ実技系のアーティストたちと北川氏に代表される理論系のアートディレクターの協働により実現されたものである。こうした、「複数の芸術領域が連関する」とともに、「実技系と理論系の人材が協働する」ことで実現されたアートプロジェクトやプロダクトデザインのプロデュースに関する講義を、「実技と理論にまたがる領域横断型の共通授業」として開講した。

【再掲10】

大学の教育研究等の質の向上に関する目標（その他の目標）
 (1) 社会との連携や社会貢献に関する目標

中期目標

地域に根ざした公立大学として、社会との連携をさらに推進するとともに、教育研究の成果を積極的に社会に還元する。

中期計画	年度計画	業務実績（計画の進捗状況）	自己評価	自己評価と異なる評価委員会の評価とその理由	添付資料番号
<p>(7) 金沢市をはじめとする自治体との連携を通して、教育研究成果を社会に還元する。</p> <div data-bbox="250 662 875 895" style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p>〔質問・意見等〕 「教育と研究の観点から大学が取り組む意義のある事業」について、学内ではどのように精査しているのか具体的に説明してほしい。</p> </div> <div data-bbox="250 949 875 1476" style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p>〔回答〕 教育と研究の観点から大学が取り組む意義のある事業を精査する際、重要となるのは、教員の研究内容、授業の教育内容とのマッチングである。社会連携事業においては、社会連携センターで依頼側の担当者に対するヒアリングを行い、予算面も含めて必要な確認をするとともに、実際に担当する教員が研究上、或いは教育上の意義を判断している。また、地域連携事業においても、公立大学としての役割を重視しつつ、本学の研究上、教育上の意義を第一に考えて慎重に受入れの可否を判断している。継続して成果をあげている事業が比較的多いのはその表れである。</p> </div>	<p>(ウ) 各自治体と締結した連携協定に基づき、教育と研究の観点から大学が取り組む意義のある事業に積極的に参加する。</p>	<p>○社会連携センターにおいて、大学が取り組む意義の有無を精査した上で、以下について各自治体と連携して事業を実施している。 ○金沢市と連携し、ユネスコ創造都市分野別会議2019の開催に併せて、本学が収集している「平成の百工比照」の中から7割を超える約5,000点を展示したほか、地元での雇用の定着促進を目的とした就職情報交換会を7月と2月に開催した。 ○社会連携事業としては、「金沢マラソン」の参加者へのメダルの贈呈、「いしかわSDGs推進プロジェクト」に係るロゴマーク、「安江金箔工芸館」の屏風パネルのリニューアル等、金沢のPR推進に向け、ハード・ソフトの両面において美大の力を発揮した。 ○加えて、「市庁舎前デジタルサイネージ時報コンテンツ」や「アートベンチの制作」、廃校となった学校の備品を再利用しての「思い出ピアノ」や「思い出黒板アート」といった、市民の方々にも楽しんでもらえる新しい取り組みにも深く関わり、来街者の視覚に訴える試みも手掛けた。 ○更に、金沢市立病院と連携して行っている「ホスピタリティアート」や「ホスピタルギャラリー」、地域で頑張っている男性を選出するイベント「かなざわステキ男子」等、地域に密着した事業にも携わった。 ○志賀町との間では、連携協定に基づき、絵画塾の継続開催に加えて、10月から11月にかけて、志賀町文化ホールにおいて本学の所蔵品である「北出コレクション」の中から、古九谷の優品を含む九谷焼等約20点を展示したほか、志賀中学校や志賀高等学校の生徒を対象に、本学の制作現場などの見学会にも取り組んだ。 ○また、29年度珠洲市において開催された奥能登国際芸術祭において、高評価を得た本学の教員・学生チームである「スズプロ」の作品公開を継続するなど、本学の教育研究活動を社会に向け広く発信した。</p>	<p>Ⅲ</p>		<p>資料6-1 資料15-1 資料15-2 資料38-1 資料38-2 資料46-1 資料46-2</p>

大学の教育研究等の質の向上に関する目標（その他の目標）
 (2) 国際化に関する目標

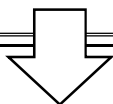
中期目標

海外の大学との交流など、学生や教員による国際交流事業を展開する。また、留学生を積極的に受け入れる。

中期計画	年度計画	業務実績（計画の進捗状況）	自己評価	自己評価と異なる評価委員会の評価とその理由	添付資料番号
(7) 教育研究に関する国際交流を充実させるため、交流協定を結ぶ大学等との連携事業等を推進するとともに、学生や教員の海外派遣事業の支援体制を整備する。	(7) 国際交流協定に基づいて、教員・学生の派遣・受入を行い、連携事業を推進するとともに、アジア諸国との交流の強化を目指す。	○東アジア地域の優れた美術系大学とのネットワークを構築し、本学を拠点とする大学間交流を推進するため、元年度より5年計画で海外協定校の拡充を図る予定である。元年度は、台湾で最も歴史のある国立台湾芸術大学との交流協定を締結した。締結は12月10日に学長と学内理事2名が同大学を訪問して行い、今後の学生の交流、教職員及び研究者の交流、共同研究等に関する協議を進めた。 ○交流協定締結校とは、以下の交流を実施し、学生の授業料免除、学生の渡航費・宿泊費を助成した。 ・清華大学美術学院へ学生2名を派遣 ・ナンシー国立高等美術・デザイン学校から学生1名を受け入れ、本学からは1月より学生1名を派遣 ・ゼント王立アカデミーより学生2名を受け入れ、本学からは1月より学生2名を派遣 ○6月には、30年度に上記大学へ留学した学生による学内報告会を、留学説明会と併せて開催し、報告者の学生は留学先で得た知識・経験に基づくアドバイスを行った。	IV		資料54-1 資料54-2 資料54-3 資料54-4

〔質問・意見等〕

何故評価がIVなのか(年度計画を上回って実施している部分)を具体的に説明してほしい。



〔回答〕

本学は、教育・研究の国際化を推進するため、海外協定校の拡充を目指している。特に東アジアについては、元年度より5年計画で大学間ネットワークを強化する方針を立て、これに着手した。当初の計画では、元年度は協定を結ぶ大学の調査に注力する予定であり、実際に中国美術学院(中国・杭州)など複数の大学との交渉や情報収集を進めた。そのなかで、長年にわたる交流実績がある国立台湾芸術大学に関しては早期に協議が纏まり、12月10日に協定締結が実現したため「IV」と評価した。なお、年度内に本学の彫刻専攻の教員と学生が訪問し交流する予定だったがコロナ禍で中止した。

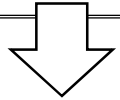
大学の教育研究等の質の向上に関する目標（その他の目標）
 (2) 国際化に関する目標

中期目標 海外の大学との交流など、学生や教員による国際交流事業を展開する。また、留学生を積極的に受け入れる。

中期計画	年度計画	業務実績（計画の進捗状況）	自己評価	自己評価と異なる評価委員会の評価とその理由	添付資料番号
(イ) 外国人留学生の受入れを拡大するため、受入体制、教育体制、環境等の検証を行う。	(I) 新たに外国人留学生を対象とする本学独自の公開講座を開催する。	○元年度より新たに、日本滞在中の外国人留学生を対象として、本学教員の指導の下で工芸を体験し、日本の文化に触れる「KANABI工芸セミナー」を開講した。全5日間で参加者は9名（中国7名、フランス2名）。初日に学長が日本工芸概説を講義した後、九谷焼窯元、加賀友禅工房、漆芸作家アトリエを訪問し、翌日から4日間は学内で、九谷焼の絵付け皿制作（陶磁）、藍絞り染制作（染織）、漆と金で描く小物漆器制作（漆工）、純銀菓子きり制作（金工）を体験した。受講者の満足度が高いことから、外国人留学生に向けて本学の魅力を発信する公開講座として、次年度以降も継続的に開講することとした。	IV		資料57-1 資料57-2 資料57-3

71

〔質問・意見等〕
 何故評価がIVなのか(年度計画を上回って実施している部分)を具体的に説明してほしい。



〔回答〕
 この「本学独自の公開講座」は当初、工芸の中でも一般的な陶芸の実技と講義による2日間程度の実施を予定していた。しかし、準備段階に入り、工芸科全体で取り組む体制を整え、また、学長と美術工芸研究所の学芸員のコーディネートにより通常は立ち入れない非公開エリアを含む工芸工房の見学も可能となり、全体で5日間、漆芸、陶芸、金工、染織の実技体験、日本工芸概説の講義及び工房見学で構成される講座となった。しかも、漆塗りに金沢の金の蒔絵粉を使い、染めに本学の天然の藍を使うなど、他の地域、他の大学では実現できない内容としたことから「IV」と評価した。

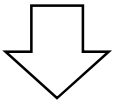
業務運営の改善及び効率化に関する目標
 1 組織運営の改善に関する目標
 (3) 人事制度の改善に関する目標

中期目標 ア 大学の特性に即した柔軟で弾力的な人事制度を運用することによって、大学運営や研究教育を効果的かつ効率的に推進する。また、教職員の研修制度の充実を図る。

中期計画	年度計画	業務実績（計画の進捗状況）	自己評価	自己評価と異なる評価委員会の評価とその理由	添付資料番号
(ウ) 教職員の育成、資質向上のために、効果的で多様な研修計画、研修方法を策定し、実施する。	(ウ) 能力開発や専門性の向上を図るため、教職員を学外の研修等に参加させる。	○中堅職員1名を国立大学法人等初任者研修会（4月8・9日金沢大学）に、若手職員1名を公立大学協会政策研修（9月5日東京）に派遣した他、公立大学協会や団体が主催する各種研修や講演会に教職員を派遣し、法人運営・大学運営に必要な専門知識を修得させた。 ○また、常に最新の知識と情報が必要となる、学生のメンタル面でのサポート強化のため、全国学生相談研修会（11月17日～19日東京、教員1名、職員1名）に教職員を派遣した。	Ⅲ		資料61

80

〔質問・意見等〕
 FD・SD活動実績の全61件は十分と考えて良いか。



〔回答〕
 職員数13名、教員数55名の本学において、FD・SD活動実績が元年度の合計で61件であったことは十分と言える数値であると考えている。大規模な大学に比べて、本学は構成員の数が少ない分、各自が比較的高い頻度で研修に参加する機会を得る状況にあり、そうした意味でも過不足は無く、逆に業務中にこれ以上の頻度で職員を派遣することは難しい。

財務内容の改善に関する目標

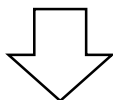
1 外部研究資金、寄附金その他の自己収入の増加に関する目標

中期目標	科学研究費補助金などの競争的研究資金、社会連携等による共同研究及び受託研究などの外部資金、寄附金等の獲得に積極的に取り組む。
------	--

中期計画	年度計画	業務実績（計画の進捗状況）	自己評価	自己評価と異なる評価委員会の評価とその理由	添付資料番号
(イ) 文部科学省科学研究費補助金等の競争的資金の獲得に取り組む。	(イ) 文部科学省科学研究費補助金をはじめとする競争的資金において、既採択の継続と新規の申請をあわせて、10件以上を目指す。	<p>○文部科学省科学研究費補助金の公募に新たに9件の申請を行った。また、三谷研究開発支援愛団、芳泉文化財団、文化財保護・芸術研究助成財団の公募にそれぞれ1件、合計12件の新規申請を行った。</p> <p>○元年度の科研費既採択の継続3件と新規採択の6件と併せて9件の事業に取り組んだ。</p> <p>○その他、油画教員が文化庁の「文化芸術による子供育成総合事業」に追加採択となった件を含め、合計10件の事業を獲得した。</p>	Ⅲ		資料39

87

〔質問・意見等〕
採択件数10件の内訳を教えてください。
(科研費の採択数に「研究分担者」を含めていないか。)



〔回答〕
ご指摘の通り、科研費の採択数に「研究分担者」を含めないこととし、以下の表記に改める。
文部科学省科学研究費補助金の公募に新たに6件の申請を行った。また、三谷研究開発支援愛団、芳泉文化財団、文化財保護・芸術研究助成財団の公募にそれぞれ1件、合計9件の新規申請を行った。
元年度の科研費既採択の継続2件と新規採択の5件と併せて7件の事業に取り組んだ。
その他、油画教員が文化庁の「文化芸術による子供育成総合事業」に追加採択となった件を含め、合計8件の事業を獲得した。

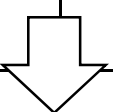
財務内容の改善に関する目標

1 外部研究資金、寄附金その他の自己収入の増加に関する目標

中期目標	科学研究費補助金などの競争的研究資金、社会連携等による共同研究及び受託研究などの外部資金、寄附金等の獲得に積極的に取り組む。
------	--

中期計画	年度計画	業務実績（計画の進捗状況）	自己評価	自己評価と異なる評価委員会の評価とその理由	添付資料番号
(ウ) 大学の特性を活かした独自の自己収入増加策を検討し、企業等からの資金の導入に取り組む。	(イ) 社会連携における外部資金のほか、市補助金や寄附金の積極的な獲得に努める。	○企業や地方公共団体からの依頼について、社会連携センターにおいて内容と教育的な効果を確認し、産学連携事業を13件、地域連携事業を11件（うち金沢市から8件）受託し、33,057千円の受託研究収入を計上するなど、当初見込の16,000千円を大幅に上回る収入を得た。これまでの社会連携事業を通して連携を深めてきた企業への働きかけをする一方、新規の問合せ企業に対しては実績をまとめた報告書を用いてPRなどを行い外部資金の獲得に努めた。 ○また、受託内容については、これからの放送・メディア業界の方向性を考えた新たなサービスの提案や、ユーザーの印象に残る経験や感動の瞬間にふさわしいモビリティデザインの提案、ユーザーの価値観や生活の変化の調査・分析による独創的な視点で2025年の新しいサービスの提案など、新技術を踏まえた未来を志向した依頼が増え、美大ならではの機能性を重視した新しいデザインの提言を行った。 ○「かなびサポーター」制度を中心とした教育研究基金について、例年寄附をいただいている企業に加え、新たに趣旨に賛同を得られそうな企業にも呼びかけるとともに、保護者懇談会においても周知を行った。	IV		資料6-1

〔質問・意見等〕
 受託研究収入について、当初見込の16,000千円は妥当か。



〔回答〕
 社会連携事業における外部資金は、年度による変動が予想され、金沢市から受託している研究にもその年度限りの依頼が多く含まれている。こうしたことから16,000千円という当初見込の金額は、継続事業の実績を念頭に、あらかじめ研究計画や授業計画に組み込める受託研究を踏まえつつ、安定して見込める金額として妥当な数値であると考えている。

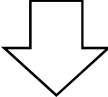
自己点検・評価及び情報の提供に関する目標
2 情報公開や情報発信等の推進に関する目標

中期目標 社会に対する説明責任を果たすため、積極的な情報公開を図る。また、大学の活動を広く社会に示すため、教育研究活動や大学の特色について、積極的な情報発信を行う。

中期計画	年度計画	業務実績（計画の進捗状況）	自己評価	自己評価と異なる評価委員会の評価とその理由	添付資料番号
(イ) 印刷媒体やホームページ等の広報媒体と方法を見直し、新規広報媒体の発行・発信を含めた改善を行う。	(ウ) 新キャンパス移転に向けた機運の醸成のため、市民に向けた積極的な情報発信に努める。	<p>○これまで取り組んできた社会連携のあゆみを「未来へ繋ぐ248のプロセス」のタイトルで12月17日～24日の期間、金沢市文化ホール展示ギャラリーにて展示会を開催した。展示では金沢マラソン完走メダル、黒板アートプロジェクト、ホスピタリティアートプロジェクト、美大メガネ部の4つの活動に焦点を当て、展示パネル、映像等でわかりやすく展示した。</p> <p>○12月22日には本学客員教授で映画監督の米林宏昌氏が「400人のチカラ アニメーション映画が生まれる秘密」と題して金沢市文化ホールでトークライブを行い、初めての試みとして会場で学生が事前制作した原画の公開添削も行い、広く市民の方々へ本学の取り組みを公開した。</p> <p>○市民が足を運びやすいまちなかの施設で同時期に開催することにより、美大への関心度を高める機会とした。</p>	IV		資料53-4 資料70-1 資料70-2

100

〔質問・意見等〕
何故評価がIVなのか(年度計画を上回って実施している部分)を具体的に説明してほしい。



〔回答〕
新キャンパス移転については計画の進捗にあわせて金沢市より発表され、本学ホームページ等でも情報発信している。年度計画はこの新キャンパス移転に向けた機運醸成を目的としているが、それに留まらず、展示会「未来に繋ぐ248のプロセス」は社会連携事業における研究成果を市民に公開する貴重な機会となった。また、講演会「400人のチカラ アニメーション映画が生まれる秘密」では米林監督が本学の教育を語ることで、入試広報上の大きな効果があったことから「IV」と評価した。

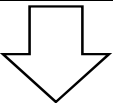
その他業務運営に関する重要目標
1 施設設備の整備・活用等に関する目標

中期目標 施設設備の利用環境を良好に保ち、有効に活用するため、常に利用状況を把握するとともに、施設等の機能保全や維持管理を計画的に実施する。また、大学の将来像を見据え、新キャンパス構想の具体化を図る。

中期計画	年度計画	業務実績（計画の進捗状況）	自己評価	自己評価と異なる評価委員会の評価とその理由	添付資料番号
(7) 施設台帳等を整備するとともに、年次的な修繕・改良計画に基づき、施設整備を実施する。	(イ) 新キャンパス基本設計に基づき、実施設計の策定に寄与する。	<p>○市や設計業者と協議を行い、新キャンパスの基本コンセプトである「開かれた美の探求と創造のコミュニティ」の実現に向け、美大の意見を基本設計に反映させた。</p> <p>○具体的には、大学の活動を広く発信する場となる「アートプロムナード」と創作に集中できる囲われた空間「創作の庭」により、地域や世界に開きつつ、学生が創造と向き合うことができるキャンパスや、全ての学生が専門分野を越えて創作する「共通工房」をリング状に、展示や合評を行うスペースである「アート commons」を随所に分散して配置することにより、様々な領域の垣根を越えて交流することができるキャンパスの実現を目指すこととなった。</p> <p>○こうした考えのもとに、各専攻の希望を取り入れ、実施設計においては各諸室の機能面や導線の確保を重視し、より詳細な空間レイアウトの協議を進めた。</p>	IV		資料2-1

102

〔質問・意見等〕
何故評価がIVなのか(年度計画を上回って実施している部分)を具体的に説明してほしい。



〔回答〕
新キャンパスでは、全ての学生が領域を超えて利用可能な「共通工房」を設けることとし、学生が作品の制作に使用する教室面積の合計の約1/3をこの「共通工房」とすることを、本学の主張として設計に反映させた。当初の計画を超えて、多くのスペースと設備を共有化することで、実技中心の大学にありがちな領域毎の施設管理の弊害を取り払い、設備の重複を防ぎ、共通教育にも有効に活用できる設計となった。加えて、教育成果としての作品を展示公開する「アート commons」(6室)と「大ギャラリー」(約600㎡)を、学外者も訪れることができる「アートプロムナード」に沿って配置するなど、学生だけではなく市民に対しても開かれた設計とすることができたため「IV」と評価した。

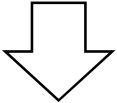
その他業務運営に関する重要目標
3 安全管理に関する目標

中期目標 災害、事故、犯罪、感染症等による被害の発生の防止に努めるとともに、被害の発生に迅速かつ適切に対応するため、危機管理体制の充実・強化を図る。また、環境に対して十分配慮する。

中期計画	年度計画	業務実績（計画の進捗状況）	自己評価	自己評価と異なる評価委員会の評価とその理由	添付資料番号
(イ) 安全衛生管理体制に基づき、労働災害、事故等の未然防止、環境の保全を図るとともに、実施体制を検証する。	(オ) 教職員を対象に、ストレスチェックを実施し、またストレスに関するメンタルヘルス研修を実施する。	○教職員を対象に、ストレスチェックを実施した。 ○また、学内におけるハラスメント防止を目的に11月14日に「教職員のためのハラスメント研修」と題したメンタルヘルス研修を開催し、教職員67名が受講した。	Ⅲ		資料27-3 資料72-1

109

〔質問・意見等〕
「ハラスメント研修」はメンタルヘルスにどのようにつながるのか。



〔回答〕
ハラスメントとメンタルヘルスは密接な関係にあり、例えば某民間会社の調べではパワハラを受けて3カ月以上たつた人の20%以上が精神科に通院しているとの報告もある。それは、単にハラスメントを受ける側の問題だけではなく、誰もがハラスメントの被害者となる可能性と加害者となる可能性を持ち合わせていることを思えば、これを意識して教育に関わること自体が、教職員のストレスにつながる大きな要因とみなすことも重要である。こうしたことからメンタルヘルスの問題に取り組む上でハラスメント研修は有用である。